



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.266

2025.11.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

—『日本先史土器図譜』と現在—

鈴木 正博

● 第66回 ● 「加曾利B2式」生成論序説

山内清男が層位と年代の新古から導出した『図譜』B1式とB2式は区分間の非連続性が明白である。文献(1980b・1981・1986・1999)はこの非連続性に接近し、敗戦後の新たな層位と「土器型式」の中間的位相を見据え、「亀ヶ岡式」の文様帯研究に則り「文様帯変遷論」の視点からB2式生成論を立論する。

文献(1980b)所収「4 加曾利B2式精製土器様式(概説)」(pp.236-288)の冒頭では、「加曾利B2式として扱う地方的範囲は関東地方であり、時間的範囲は『日本先史土器図譜』における加曾利B式(中位の古さ)である。加曾利B1-2式の時代に勃興した各種系列の伸長及び交渉が如何なる変遷を遂げて新しい時代の到来となったのか、実に興味深い所である。」との立場を明らかにし、敗戦後の言論に自由を謳歌する各種商業出版物(多くは概説書)や層位無き独自の型式観披瀝は殆どが理無しの故を以て翻弄されず、遺蹟に見出す「土器型式」を層位的に繰返し検証する山内清男の立論に習う。同時に「そのためには加曾利B2式における地域的系列の確実な特徴を把握し、また、構造的なまとまりを示すことはないが、型式間あるいは系列間つなぐ動的な連係を示す系列を把握することが前提となるのである。そこに至る複雑な操作は先史考古学における最も基礎的な部分であり、妥協は決して許されない分析の分野である。一方、型式変遷の原理そのものを扱うのが統合の分野である。」と、「B2式」研究に「文様帯変遷論」の準拠と共に、複雑なる系列展開及び多様な動的連係への拡張として新たな型式学的接近法を強く要請するのは、敗戦後の概説書等を淘汰し抜本的な研究の転換を企図する初心からに他ならない。

とは言え当時の加曾利B式研究の方法論的欠如並びに遺蹟調査資料の制約という状況には、「したがって、加曾利B式(古い部分)から(中位の古さ)に至る各地域の動態解明等はおお

年程将来に委ねなければならないかもしれないのである。」との弁解も尚付き纏うことになる。

然るに初心に従えば、それまでの不安定な層位や複雑多様な土器群に対し、「文様帯変遷論」からは年代区分間の緩衝構造として「B1-2式」系列群の導出を文献(1980b)所収「3 加曾利B1-2式精製土器様式(概説)」(pp.199-235)にて併せ開陳し、関東以西にも広く通説への見直し機会とすべく文献(1999)に至る。そこでは北陸新編年を構築(本連載第52回第54図編年表参照)するが、寧ろ同時に1981年以降の「B1-2式」アッセンブリジの最も安定した廃棄層位として埼玉県川口市石神貝塚第3号住居址出土土器群を選定し、付加価値として器種別の型式学的特徴や「小仙塚系列」と伴存系列による「型式組成」も導出する。こうして中妻貝塚等常南総北以外の大宮台地南部でも『図譜』B2式と「小仙塚系列」は年代差となり、層位的に交差しない。

さて、『図譜』B1式からB2式への非連続性は、『図譜』B2式冒頭図版(図版30-1・2)の第74図を効用の学びとする。第74図の「漏斗状筒形深鉢」と「羽状斜線文」は前代の「道統」からは決して承継し得ない異質な形態・装飾となり、恰もミッシングリンクの如き衝撃が印象付けられるが、改めて『図譜』B1式の冒頭2図版(図版20・21:第56図参照)を異質さの学びとして想起するならば、異質効用の共通性が訴求される。

ここに「土器型式」の外延に新たな受容構造を生成する異質効用現象が指定されるのであり、「漏斗状筒形深鉢」と「羽状斜線文」の成立には「B1-2式中妻系列」の生成プロセスと共通する異質効用による生成現象が深く関与し、同質の如き地域性に至る。文献(1981)は「中妻系列中妻類型」の「A形式」を「本形式」の出自は

奥羽方面土器群との交渉を観ることが可能である。中妻系列とした主文様である口縁部縄紋帯の主要分布は東北地方及び北海道地方である。」と異質性を裁断し、文献(1984)は「中妻系列」を北海道手稲遺蹟や宮城県白石市白畑遺蹟等の文様帯と比較の上、「B1-2式」に北海道・東北方面との密な連絡・交渉関係を見出しつつも、「中妻系列」の体部文様帯(詳細は文献(1981)参照)に観る異質効用は東関東独自の新たな地域性を生成する。

そこで再び第74図(図版30-1・2)の異質効用に学ぶ。「漏斗状筒形深鉢」は『図譜』以前の大森貝塚や椎葉貝塚等にも類例が見出せるが、その波状口縁(丸山形と尖山形の2者)から体部に至る特異なプロポーションは今日東北地方から北海道に至る広域に共通する深鉢形態である。他方で体部文様帯に注目するならば、「羽状斜線文」は東北地方から北海道の体部文様帯としては稀な装飾で、明らかに『図譜』B2式の独自性となる。

畢竟、「B2式」は「漏斗状筒形深鉢」や体部の幾何学系磨消縄紋土器にも東北地方の強い影響が窺われる中、『図譜』B2式冒頭図版は体部文様帯が異質効用により「羽状斜線文」として在地化し、主要な装飾を担う。こうして文献(1980b)により「羽状斜線文」を含む「遠部第2類土器」は広義の「斜線文土器」にアッセンブリされ、常南総北に「遠部系列」を構成する。



▲第74図:『図譜』B2式の冒頭図版(図版30-1(遠部)・2(江原台))

※巻頭連載は隔月です。次回は鴨志田篤二さんです。

目次

■加曾利B式土器 「加曾利B2式」生成論序説(第66回)	鈴木正博 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第258回)	齋藤 葵 …3
■考古学の履歴書 私の考古遍歴(第17回)	工業善通 …2	■考古学者の書棚 『宗教認知科学入門』	守谷健吾 …4

考古学の履歴書

私の考古遍歴 (第17回)

工楽 善通

文化庁の付属機関では、永年勤続者を対象に在外研修と称して、個人が研究テーマを設定して海外へ2ヶ月以内で出張して研究を進める制度?があった。全60日のうち、40日間は先方の承諾書をとったうえ、同一の研究機関又は博物館に滞在して研究することになっている。

私はこの考古遍歴第9回に記したF・シューベルトさんが居るドイツ考古学研究所に滞在することにして申請を出し、3年後の1978年度の在外研修員として受理された。訪問国はドイツ、スウェーデン、イギリス、フランスの4か国とした。先年この研修員を経験した田中琢さん、佐原さんからは、届出の4か国以外は絶対に他国へ出るなよ!と釘をさされた。帰国してから文化庁へパスポートの提出を求められるかもしれん!と。出張期間を目いっぱい60日間としたが、厳しい日程である。ちょうどこの頃、私は小学館の世界陶磁全集1-日本古代篇の巻で、「東日本の弥生土器」を執筆することになっており、夜も他の仕事をかかえて四苦八苦していた。結局この原稿は未完のまま、ヨーロッパで仕上げることで、小学館へ頼みこんだ。また各所へのみやげ物として、英文の解説がある過去の展覧図録等を集めるなど用意しなければならなかった。行先は北欧が中心なので冬季をはずし、8月18日に大阪を出発することにし、準備を進めたが、色々やり残し、出発の前夜は一睡もせず、ランニングシャツのまま伊丹空港まで友人に自動車で送ってもらったことは忘れられない。

最初の訪問地スウェーデンに着き、リムジンバスでストックホルム駅前まで行って下車すると刻で、まず目に入ったのはネオンで飾られたマクドナルド店で、こんな所にまでアメリカ資本がはびこっているのかと幻滅した。翌朝はまず一番に、全く無知である北欧史について知るべく国立歴史博物館と北方博物館へ行った。両者共に大きな博物館で、先史時代の所では、さすが沢山の青銅器が並べられて、モンテリウス風に解説されていて勉強になった。回る部屋の多くがキリスト教史とその文化展示で、最後には少々うんざりした。後者館では、中世のバイキングの活動が、多くの出土品と共に展示され、バルト海沿岸に多くの都市を生み、さらに内陸部へ進んで交易を広げていった様子が説明してあって、後に行く各国の歴史を理解する上で大変役立った。

スウェーデンに来た目的の一つには、このストックホルムにある遠東博物館を訪ねることで、1921年にアンダーソンが中国の仰韶遺跡で発掘した彩陶が一括して陳列してあるので、それを見学することができた。湾を見降す丘の上の三階の建物で、古めかしい木製の棚にそれらは並べられていた。北欧で中国の出土遺物が見学できて嬉しくなった。そこからもう一つの目的である、日本でも紹介されることの多いスカンセン野外博物館へバスで行った。低丘陵の林の中に農家風の茅葺や板葺の建物が点在し、その間に家畜の放牧地が広がるのどかなフィールドミュージアムで、園路を歩いていると、時折農夫や職工の姿をした人々と出会い、英語でいろいろと説明してくれる。その頃日本では、まだ本格的なこの種の博物館はなく、10年も前にスカンセンを見た坪井さんからよく聞かされていた野外博で、やっと見学できたと満足感を覚えた。野外のベンチでおやつとビールを頼んだら、お皿いっぱいハエが集まって来たのは良い思い出。

次の目的は、ストックホルムの港外で1628年に、進水して間もなく沈没、1961年に引き上げられたヴァーサ号という木造軍船を、1960年代に湾岸に建てた覆屋でP.E.G.による保存処理をしている施設見学である。この建物前に行くと、大学生くらいの女性が、スウェーデン語による解説と英語での解説のグループに分かれるよう言い、次は何時何分から誘導しますとアナウンスして、それに従って屋内に入った。中には全長約60m余の船体が、ほぼ原形通りに横たわっており、圧巻であった。この時もまだ海中から採取した部材を、適所に職員がはめ込んでいた。そして30分おきくらいに、P.E.G.が各所からシャワーで注がれていた。

このWasa号の保存処理は、後に、大阪府立狭山池博物館の巨大な堤体や樋の保存に、また韓国の新安沖の木造船の保存にもお手本となった重要な記念物である。その後、保存処理が終わったようで、1990年には近くに移転して、恒久的な新たな博物館となっている。最近、水中考古学の成果を語るテレビ放映で、会場の背景に新館とこのヴァーサ号が映っていた。

日曜日は博物館等が休館で、ヘルシンキから北へ列車で40分の所にあるウプサラ大学へ行き、そこにあるリンネ植物園を見学した。リンネ(1707~1778)はここで学び、広大な植物園を残し、今は一般公開している。帰路ストックホルム駅構内で貼り並んでいるポスターを見ていると、A1大の目立つもので、鉄器や青銅器、土器などの実測図を所狭しと配置して何色かで印刷したポスターを見かけ、マルメという町の博物館の展覧会の案内で、その場所を尋ねると、「スカンジナビア半島を南へ回って行くので、ほぼ半日かかる」という返事で、見学はあきらめたが、この後日談は次回に記す。

いよいよ主たる滞在地のドイツ入りである。ストックホルムからハンブルグへ飛び、西ベルリンへ向い、目的地のドイツ考古学研究所を訪ねた。Dr.クルッグという中年の女性研究員が世話をしてくれた。研究所は1829年に設立され、1981年には設立150年を迎えるという。国外にも、エジプト、イランに支部があるそうだ。ベルリンが本部で、フランクフルトには考古学部門があって、シューベルトさんは、そこに属し、5~6日後にはそちらへ移動する計画だと伝えられた。

このベルリンの建物は新しく、ガラス窓の大きい明るい図書館を案内され、新刊書はほとんどここに納まっているとのことであった。建物を出て植込みのある裏庭を通過して、その先にある木造2階建ての建物がゲストハウスで、2階の1室が私の部屋であると案内してもらった。すばらしい部屋だった。帰国後、佐原さんに教えてもらったことだが、自分もこのゲストハウスに泊り、この建物はギリシャ考古学者であるヴィーガント(1864~1936)という方の元邸宅であったそうだ。

次の日は、日本でも有名なダーレム博物館に行った。ここは歴史館、民族学博物館、インド美術館、イスラム美術館などに分かれ、それぞれ秀品が陳列されており、図録や参考書でよく見る作品等があり、丸二日を要した。民族博は、大阪千里の民博がここをお手本にして展示計画を立てたということを、初代館長の梅棹忠夫さんが言っていた通り、その類似性が見て取れた。先史時代展示については学ぶことが多かった。私がベルリンに行った1978年は、東西ベルリンがまだ壁で分断されていた時で、壁を越えようとして射殺されたというニュースがよく流されていて、少々不安であったが、しかし、西ベルリンに居る間に、どうしても東ベルリンにある有名なペルガモン博物館等へ行きたいと思った。東への行き方を聞いてみると、車では行けど、列車では行ったことはない、と返事された。私は列車で行くしかないの、とにかく、市中央部にある鉄道のツォー駅に行き、東ベルリン方面行きの列車に乗り、四つ目のフリードリヒ・シュトラセ駅で降りた。(次号に続く)

略歴

1939年	兵庫県高砂市に生まれる
1958年	兵庫県立高砂高等学校卒業
〃	明治大学文学部史学地理学科入学
1964年	同 大学院修士課程修了
〃	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部へ入所
1969年	文化庁記念物課へ出向
1973年	奈良文研平城宮跡発掘調査部第2調査室へ配属
1992年	奈良文研飛鳥資料館 学芸室長
1995年	埋蔵文化財センター長
1999年	奈良国立文化財研究所定年退職
〃	(財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所勤務
2001年~2021年3月	大阪府立狭山池博物館館長

隔月連載です。次回は山本暉久先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 258

神成松遺跡 ～神奈川県伊勢原市

齋藤 葵

伊勢原に眠る中世の館

神成松遺跡は神奈川県伊勢原市の伊勢原駅から北西に約4km離れた場所に位置している。大山の麓から平野にかけて形成された上粕屋扇状地上に立地する遺跡である。近世から縄文時代の様々な遺構が見つかっていて、実際には断続的だが、とても長い間人々に使われてきた土地であることがわかる。なかでも中世の調査では道や溝、掘立柱建物跡などが見つかっており、2条の溝に挟まれた範囲において、複数の掘立柱建物跡が集中して建てられていた状況が確認されている。溝は現存値で幅が約2メートル、深さが約1mで、断面は逆台形であることがわかっていて一辺が東西幅約75mであることが明らかになっている。ただ、もう一辺の角が見つかっていないため、南北の長さは不明で全体像はわからないが、建物群を四角く囲う区画溝と考えられている。建物群については、溝の外側にも掘立柱建物はああるが、特に内側に密集することが明らかになっている。溝の内側には掘立柱建物が15～20棟、竪穴状遺構が16基、確認されており若干ずれるが、溝や掘立柱建物は、おおむね東西南北に沿って造られている。こうしたことから、中世の「方形館」と考えられている。当遺跡では溝を渡るための橋や門といった施設は確認できていないが、竪穴状遺構が方形館の南東と東側に集中している状況から、居館の入り口は西側に位置する可能性がある。また、方形館から少し離れた場所では東側と西側、そして南側の場所で、区画溝に沿う形で道が走る状況が確認された。区画溝と道の時期関係は、今後検討する必要があるが、区画溝と道の配置状況から方形館の外側を区画溝だけでなく道によっても囲われていたのではないかと考えられ、方形館を中心に周辺が開発された可能性が指摘されている。

出土した遺物については溝の中から、かわらけや焼土のかたまり、12世紀～14世紀ころに中国でつくられた青磁の破片が出土している。残念ながら出土遺物の量が少なく、破片であることから、出土遺物だけでは断定できないが、遺構の規模など総体的に検討すると方形館は鎌倉時代を中心とする「御家人クラス」の屋敷である可能性が想定されている。また、珍しい出土遺物として水晶製の数珠の出土が挙げられる。T字状の穴が施されており、数珠の親玉であることが推定されている。似たよう

な遺物の事例として、鎌倉市の永福寺跡の経塚から出土した水晶製数珠が挙げられ、親玉には同様のT字の穴が施されている。

中世における神成松遺跡を考える

当遺跡から北東には寺院跡とされる上粕屋・和田内遺跡と西には館跡とされる子易・中川原遺跡が位置している。これらの遺跡がある大山山麓は、安楽寿院という京都のお寺に寄進された糟屋荘と呼ばれる荘園に含まれる。そして糟屋荘司として荘園を管理していたのが糟屋氏という一族で、この糟屋氏は、相模国の守護をしていた藤原良方の子である元方が糟屋氏の祖とされていて、文献史料からは12世紀中頃に、藤原元方の子である糟屋盛季が「糟屋荘司」を名乗っていることが確認されている。また、その盛季の子孫にあたる有季は鎌倉幕府の御家人で、源頼朝が1190年に上洛する際には太刀持ちの役をつとめるなど活躍している。有季の妻は比企能員の娘で、有季の子の有久は後鳥羽上皇の西面武士として仕えていたことが文献史料から明らかになっている。以上のように、糟屋荘司として荘園管理をしていたことから、糟屋氏がその土地における有力者であったことが読み取れ、また、糟屋有季や有久の経歴などからは鎌倉幕府だけでなく京都政界とも深い関係にあったというふうに考えられている。先ほど挙げた上粕屋・和田内遺跡周辺は、平安時代末に糟屋氏によって創建された極楽寺というお寺が所在していたという伝承が残る地域になる。遺跡からは石組遺構や大量の瓦が見つかっていて、この石組遺構は湯屋または、厨いいわゆる調理場であったことが推定されており、火どころの大きさから湯屋の可能性が高いのではないかとこのように考えられている。当時、湯屋は体を清めるという目的で寺院に備えられており、この遺構は極楽寺の一部であるとされている。このように神成松遺跡の方形館と同時期と思われる寺院跡や屋敷跡が近くで見つかり神成松遺跡は伊勢原市一帯の中世、特に当該地域を本拠としていた糟屋氏について考えるうえで重要な遺跡といえる。

さいごに

神成松遺跡をマイ・フェイバレット・サイトとしたのは、主担当者として初めて調査を担当した遺跡で、思い入れがあるからだ。筆者が担当し始めたときには、すでに方形館は発見されていて、少し離れた場所を調査した。そのため、道の調査が主で、ちよつと地味だなぁ。。。と最初は感じていたが、年度を重ねて進めていくうちに、道からは牛や馬の骨が出土したり、他方では馬小屋と思われる竪穴状遺構が確認されたりと、少しずつだが方形館に関連しそうな中世の遺物や遺構を発見できたのは嬉しかった。現在は別の遺跡を担当していて、整理作業の担当になるのか分からないが、今後も、過去の調査成果の整理など、より詳細に神成松遺跡について検討してけたらと思う。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは三橋友暁さんです。



考 古学者の書棚

「宗教認知科学入門」ー進化・脳・認知・文化をつなぐー

An Introduction to the Cognitive Science of Religion : Connecting Evolution, Brain, Cognition, and Culture

クレア・ホワイト 著 藤井修平・石井辰典・中分遥・柿沼舞花・佐藤浩輔・須山巨基 訳／勁草書房(2025) —— 守谷 健吾

この度は、「友達の輪」企画で執筆の機会をいただきました。書評と申し上げるには私の力量では難しいかと存じますので、あくまで書籍やその内容に関するご紹介に留めさせていただければと存じます。

『宗教認知科学入門』は、宗教現象を多角的かつ科学的に解明する「宗教認知科学(Cognitive Science of Religion 略CSR)」という学際的分野の奥深さを体系的に提示する一冊です。本書は、認知科学、進化生物学、心理学、神経科学、人類学といった多様な学術領域の知見を統合し、人間が宗教的思考や行動をどのように形成し、伝達してきたのかを探求します。

I. 宗教認知科学の成立背景と目的

2000年代に確立された比較的新しい学際的分野であるCSRは、その研究の礎を1990年代の文化研究、特にポストモダニズム、文化決定論、極端な文化相対主義といった当時の支配的な思潮への批判的対抗の中に持ちます。E・トーマス・ローソンやロバート・マコーリーといった先駆者たちの尽力により、1950年代の「認知革命」がもたらした人間の心に関する新たな理解が宗教研究へと導入されました。

著者のクレア・ホワイトは、CSRの創設者から直接指導を受けた第二世代の研究者であり、米国で初めて宗教学科においてCSRの専門家として終身雇用資格を獲得した人物です。クレア・ホワイトは本書を通じて、CSRがどのように成立し、その学際的な魅力と多様な研究方法を、代表的な研究例とともに詳細に解説しています。

CSRの中核にあるのは、私たちの心が宗教的な思考や行動を積極的に受け入れ、理解し、「伝達するプロセス」に深く関与しているという認識です。これは、宗教という複雑な現象もまた、科学的な探究の対象となりうるという大胆な前提に立脚しています。従来の宗教研究が、主に「記号とシンボルのシステム」としての宗教を解釈的に記述することに重きを置いてきたのに対し、CSRは「なぜ」そして「どのように」宗教的な観念や行動が学習され、心の中で表象され、人々に伝播するのか、さらにはそれが集団の結束から規範の成立そして社会構造に与える影響のメカニズムを解明することを目指します。このアプローチは、従来の考古学が「何が発見されたか」という物質的な記録や現象の記述に重点を置いてきたのに対し、それらの物質的証拠の背後にある「なぜそれが生じたのか」という根源的な問い、すなわち「what」から「why」を探求するという画期的な視点をもたらします。

II. 宗教現象を解き明かす認知的枠組み

宗教認知科学、特にそれを考古学に応用した認知考古学は、発掘された遺物や建造物を単に記述するだけでなく、それらを作り、使っていた人々の心の内部、その認知プロセスにまで踏み込む大きな可能性を秘めています。これは、単なる事象の記録を超越し、人間が普遍的に持つ認知傾向と、文化が過去の宗教現象をどのように形成したのかを解き明かす、強力な「説明的枠組み」を私たちに提供するものです。なぜ特定の宗教的観念や行動が、時代や文化を超えて繰り返し現れてきたのか、なぜある儀礼がこれほどまでに広まり、継承されてきたのか……こうした問いに対し、私たちの認知バイアスや文化的背景という観点から、科学的な説明を導き出すことを目指しています。

本書では、神、死後の世界、儀礼、道徳、超自然的行為者、生まれ変わりといった、人類が古くから抱いてきた普遍的なテーマに、認知科学、心理学、進化生物学といった学際的な知見を適用することで、新たな光を当てた研究成果が紹介されています。特に、人間の認知が超自然的行為者の概念形成と伝達に果たす役割は、CSR研究の主要な焦点の一つです。

III. 主要な認知メカニズムの解説

CSRが宗教現象を説明するために用いる主要な認知メカニズムには、以下のものがあります。

1. 行為者検出装置(ADD)

行為者検出装置(Agency Detection Device 略ADD)は、かつて過活動行為者検出装置(Hyperactive Agency Detection Device 略HADD)とも呼ばれ、環境中に存在する行為者(捕食者など)を素早く検出するための進化的な傾向として理解されています。この傾向は、生存のために危険を回避する上で有利に働き、曖昧な状況においても目に見えない存在を感知する方向に働き、神や霊といった超自然的行為者概念の創発の一因となります。これは、適応的な能力が、意図しない副産物として宗教的観念を生み出したという「副産物説」の例とされています。

2. 最小反直観的(MCI)理論

最小反直観的(Minimal Counterintuitive 略MCI)理論は、特定の概念が文化的に広く伝播するメカニズムを説明します。この理論によれば、完全に直観的な概念(例：空を飛べない人間)や、あまりにも反直観的な概念(例：存在せず、歳をとると小さくなり、動けず、毎週火曜日しか思考しない人物)は、記憶されにくく、伝達に適しません。しかし、日常的な期待をわずかに裏切る、つまり「最小反直観的」な概念(例：空を飛べる人間や壁を通り抜ける幽霊)は、人々の注意を引きつけ、記憶に残りやすく、文化的に広まりやすいとされています。これは、MCI概念が独特であるがゆえに認知的な処理が促され、興味を喚起するためと考えられています。これらの認知バイアスは、超自然的行為者の概念がなぜ多様な文化において普遍的に見られるのかを説明する上で重要な役割を果たします。

3. その他の重要な認知メカニズム

本書で詳細に論じられる他の認知メカニズムとして、以下が挙げられます。

- ・素朴二元論：心と身体が別個の存在であると直観的に理解する傾向で、死後も心が存続するという信念を支えます。
- ・擬人観：人間以外の存在に人間的特徴を帰属させる傾向で、神概念の形成に寄与します。
- ・目的論的思考：物事が目的を持って創られたと考える傾向で創造論の説明を支持します。
- ・応報的思考(内在的正義)：善行が良い結果を、悪行が悪い結果をもたらすと考える傾向で、道徳的秩序の維持や超自然的介入の信念と関連しています。

これらの認知バイアスや心的メカニズムは、私達が世界をどのように認識し、意味を見出し、なぜ集団を形成してきたのかという、人類の根源的な問いに対する洞察の強化に役立つかもかもしれません。

IV. 結論：宗教認知科学の展望

『宗教認知科学入門』は、宗教というともすれば「神秘に包まれがちな現象」に対し、科学的な探究の力を導入することで、多角的かつ深い理解への道筋を示しています。その理論と多様な方法論は、宗教の始まりと存続に関する包括的な説明を築き上げる可能性を大きく広げています。CSRは、現在進行形で、人間の心の普遍的な働きと文化的要因が相互に作用し、多様な信仰の形を生み出すメカニズムを解明し続ける、有望な学術分野として発展を続けています。

アルカ通信 No.266

発行日 2025年11月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801
長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp
URL : http://www.aruka.co.jp